

新刊紹介

榎本淳一著

『日唐賤人制度の比較研究』

浦西直也

本書は、著者がこれまでに発表してきた日唐古代身分制に関する論文を中心に構成された、「同成社古代史選書」の一冊である。

紙幅の都合上、以下に目次を載せることで各章の要約としたい（括弧は初出年）。

序章 本書の視角と構成（新稿）

第一章 ヤッコと奴婢の間（二〇〇一八）

第二章 律令賤人制の構造と特質（一九九二）

第三章 日唐官賤人の解放規定について（新稿）

第四章 日唐賤人の身分標識について

（二〇〇三）

第五章 日唐戸令当色為婚条について（二〇〇二）

第六章 天聖令からみた日唐奴婢売買の諸問題（二〇〇八）

第七章 藤原仲麻呂と女楽（二〇〇〇）

終章 日本古代の奴婢は奴隸か（二〇〇四）

附編一 『新唐書』百官志の官賤人記事について（二〇〇七）

附編二 唐戸令当色為婚条をめぐる覚書（一九九五）

本書は「唐代の賤人制との比較により、古代日本の賤人制の特質、また賤人としてきた隷属民の実態を明らかにすることを目的」（二頁）としている。

その結論として以下の四点を挙げている。

一、唐制では規定されていない奴婢に

対しての口分田の班給が日本では規定されてお

り、官奴婢は充役時以外、口分田

耕作が求められていたことから実質的に支給されていた。また、私奴婢についても実質的な班給があったと類推する。

二、奴婢の婚姻は唐では認められていなかったが、日本では同身分間という制限があるものの、婚姻が認められており、唐と比較して奴婢の「人」としての性格がうかがえる。

三、奴婢の身分標識としては服色と入れ墨がある。服色は唐では青碧が制度として規定されていたが、日本では私賤人が「朝廷公事」の際にのみ椽墨色の衣を着用することとなっていた。また、入れ墨についても唐では官奴婢には「印髻」が、私奴婢には主人による私的な入れ墨がそれぞれ入れられていたが、日本では入れられていなかった。これらのことから、日本では視覚的に奴婢を識別する手段は存在しなかった。

四、唐では律令の売買規定の検討から奴婢は財産としての性格が明確化されて

いた。一方日本では、規定は存在するものの、実態として奴婢の売買は東大寺関係等限定的であり、商品化されていたとは言えず、財産としての性格は希薄であつた。

以上四点を総評し、日本の古代社会には、発展段階説で想起されるような「隷階級も奴隷的な社会集団も存在しなかつた」（二六八頁）として全体を締めくくる。

興味深い点を三点挙げたい。

一点目は、序章で著者も述べていることであるが、全体を通じて唯物史観にとられない、史料に基づいた検討が行われている点である。これまでの日本古代身分制研究では、日本に奴隸制が存在していたという前提で研究がなされてきたさらいがある。しかし本書では先入観にとられず、史料上で述べられている内容から当時の制度や実態を復元すること

を画している。

二点目は、官賤人の階層性について考察している点である。これまでの研究では官奴婢は六十六歳で官戸となり、その官戸は七十六歳で良人になると考えられ、「官戸—官奴婢」という階層性が存在したということが通説とされてきた。

しかし著者は戸令の官奴婢条を検討し、官戸とされるのは没官された者のうち戸をなした者であり、七十六歳で良人となつたとする。一方官奴婢は、同条から廢疾か六十六歳になれば、直接良人となつたと解釈でき、また、当時の太政官符では、東大寺に施入された官奴婢がすべて直接良人となつていることから、官奴婢は官戸となることなく良人となつたと考察する。以上のことより官戸と官奴婢は明確に区別されており、そして身分は並列的で直接的な上下関係はなかつたと主張している。この点については今後

代身分制研究において重要な論点を提示しているといえよう。

三点目は、これまでの唐令の復元に於いて再検討を行い、訂正案を提示している点である。唐令の復元は仁井田陞氏による『唐令拾遺』をはじめとして、『唐令拾遺補』や『天一閣藏明鈔本天聖令校証』が編纂され、多くの研究で使用されてきた。これらに対し著者は、身分制に關する部分について『唐会要』や『冊府元龜』等を用いて史料批判を行い、唐令の復元案を展開している。これらの案は、これからの日唐律令研究に影響を与えることが期待される。

全体を通して漢文に書き下し文を掲載しており、自らの解釈を提示しているため、丁寧かつ分かりやすいのも特徴的である。また、これまで日本古代身分制研究で広く使用されてきた「賤民」という言葉を用いず、唐の良賤制に倣い、「良人」と対になるものとして「賤人」とい

う用語を使用している点も注目に値しよう。

本書はこれまでの日唐の身分制研究に一石を投じ、研究の発展に寄与しているといえるだろう。是非ご一読をお勧めしたい。

(同成社 二〇一九年一〇月 A5判)

二三四頁 本体価格五五〇〇円)